

倉田稔『ウィーンの森の物語』
(永原和夫名誉教授記念号)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-02 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/11786

書評

倉田稔『ウィーンの森の物語』

上 条 勇

(1)

最近オーストリアに関する出版物が多く見られるようになった。しかし、その多くは、ハプスブルクブームを受けたオーストリアのガイドブックかそれに類した書物、あるいはハプスブルクに関する歴史書である。その中で倉田稔著『ウィーンの森の物語』（NHK ブックス，1997 年）は、ウィーンの四季，冠婚葬祭，市民の日常生活を描いた異色の労作である。このような書物こそ長らく待ち望まれたものである。

倉田氏は、これまでウィーンに2度，合わせて3年間長期留学し，また，短期間の訪問をしばしば行っている。最初の留学の動機は，オーストロ・マルクス主義者のひとりで高名な経済学者のルドルフ・ヒルファディングに関する調査研究であったという。しかし，倉田氏は，留学中，その関心をヒルファディングからオーストリア史に広げ，とくに啓蒙君主でオーストリアの近代化に努めたヨーゼフ二世に興味をいだかれた。近年その研究成果を着々と発表されており，『ハプスブルク歴史物語』（NHK ブックス，1994 年）をものにされた。この本をオーストリアの歴史編とすると，本書は現代生活編ともいうことができる。

本書は，1990 年から 91 年の1年間，倉田氏が友人クルト家に下宿した時に見聞し体験された記録に基づく。全体日記調の軽快な文章からなり，日付を追った叙述と5つの主題に沿った叙述が交差する構成からなっている。主題をあらわす章別編成は，次のとおりである。

第1章 ウィーンという劇場——生活の四季折々に

第2章 ウィーンの愉しみ——輪舞曲とともに

第3章 サラダボールの中の民族

第4章 “世界史”の街で——二つの世紀末

第5章 “東方”への最前線——東欧へ、そして東洋へ

本書のねらいは、ウィーンの普通の市民の日常的な生活を、日本との比較をとおして描き、現代オーストリアへの日本人の理解を深めることにある。通例これはなかなか難しい課題である。というのは、倉田氏も指摘しているように、オーストリア人とりわけウィーン市民と友達になることははなはだ難しいからだ。私も最近ウィーンで生活していたが、とうとうオーストリア人に友人といえるほどの知人をつくることができなかった。この点、倉田氏は大変幸運に恵まれたといえる。その理由を考えると、本書に登場する倉田氏は、大変陽気で人なつっこく、愉快な人だ。こうした倉田氏の人柄が幸運をつかむ機会を与えた。また、友人クルト氏は、長期にわたって世界旅行をした経験があり、アジア通でもある。彼のジョイ夫人は、フィリッピン人である。通例、ウィーン市民は、日本人観光客には、たくさん金を落としてくれるというので親切だが、ウィーンに住んでいる日本人となると話は別である。それに最近難民、外国人労働者の急増によって国民の間に外国人に対する敵愾心も生じており、ナチズムを礼賛するハイダーという自由党の右翼政治家が外国人排斥の弁をぶって人気を博する時勢である。倉田氏は、開明的な、独特のライフスタイルをもつクルト氏と幸運な出会いをした。

本書の舞台となったクルト家の家族構成は、クルト夫妻の他、ライラという女の子がひとり、それと高齢のおばあさん（ドイツ語でオーマ）の4人である。クルト氏は、製薬会社のセールスマンで、ジョイ夫人はおもちゃ工場で働いている。ライラは小学生で、ピアノを習っている。本書は、このクルト家とその親戚、音楽学校そして街で知り合った人々の生活と人間模様を中心に組み立てられている。そして時々差し挟まれる倉田氏の文明批評と社会批評がわさびのように効いている。1年間の四季の折々、倉田氏が自ら体験した冠婚葬祭が描かれていて、エピソード、小話もまじえてあって、オース

トリアの出来事とオーストリア人の暮らしが楽しく伝わってくる。

(2)

現在のオーストリアの人口はおよそ 800 万人で、その首都ウィーンには 160 万人が住んでいる。ウィーンはかつてハプスブルク帝国の首都として栄華を誇った。いまでも当時の歴史的な建物が並び、非常に文化の香り高い都市である。オペラ、コンサートが連日のように開かれていることは、敢えていうまでもない。郊外には鬱蒼とした、広大なウィーンの森が広がっている。倉田氏が居を構えたところは、このウィーンの森を背後に控えた静かな住宅街である。そこを中心に繰り広げられた人間絵巻が本書の内容をなしている。本書のタイトル『ウィーンの森の物語』は、そこから由来し、また、ウィーンの市民生活を象徴的にあらわす言葉をなしている。

倉田氏が述べているように——最近多少変化が見られるものの——、ウィーン市民の生活はゆったりしている。人は、一般に残業などというものはせず、早くに家に帰り、プライベートな生活を愉しむ。夏には、ウアラウプという長期休暇を過ごす。名目的な賃金は日本の方が高いが、内実の点では、ウィーン人の方がお金でははかれない豊かな生活を送っており、何よりもゆとりがある。老後の生活の保障も行き届いている。倉田氏は、本書の中で、日本人とオーストリア人の労働観の違いを指摘しつつも、残業で追われ、年休も満足にとれない、一生あくせく暮らす日本人の日常生活に疑念を述べている。私も同感である。ウィーンで暮らすと、日本についていろいろ反省させられる。

倉田氏は、ウィーンの物価は高いと述べている。確かにヨーロッパの都市の中ではウィーンの物価は高い。何よりもタバコが高く、たとえばマールボロは 41 シリング (430 円くらい) で、愛煙家の私は、はなはだ弱った。しかし、その他の点では、日本と比べると、概ねいくらか安い。何よりも食料品が安い。今日スーパーマーケット (倉田氏は本書であげていないが、現在、ビラ、モンド、ホーファー、ツィールプンクトというスーパーが目につく)

で買くと、500 ミリリットル缶のビールは、高い方のグレッサー、ツィファーでも 100 円くらいである。ワイン、ウィスキーも信じられないくらい安い。清涼飲料水も 1.5 リットルで 100 円内外で買える。

倉田氏は、ウィーン市民の四季折々の行事、冠婚葬祭を自ら体験しつつ描く。ひとりの人間の死にも立ち会ったという。倉田氏の描くウィーン市民の四季折々には、なるほど形や慣習こそ違うが、そこにあたたかい同じ人間の生活があると、当たり前のことながら、改めて感じさせる。違いにこそ気をつければ、民族を超えてお互いに理解し合える。本書をとおして、そのことに気づかされた。本書のクリスマス、大晦日の叙述に出くわし、自分の留学生生活が懐かしく思い出された。クリスマスには街角にクリスマスツリーが売りに出され、年の瀬には、縁起物の大中小様々のプタが売り出される。中には札束をくわえたプタというものもある。大晦日（ジルベスターという）の夜には、日本同様に、年忘れの歌番組がある。時計の針が零時を超えた時、街角のあっちこっちで爆竹がならされ、花火があがる。私は凍てつく外に出て、花火を見に行った。倉田氏の叙述は、ウィーンでもう一度生活したいという気持ちを誘う。

ウィーンは「東方への窓」といわれる。実際に、スロヴァキアの首都ブラチスラヴァには汽車で 1 時間以内で行ける。日本の通信社、新聞社もウィーンを本拠にして、東欧をカバーする。ウィーンは、また、真の意味での国際都市である。多くの人種、民族が行き交う。倉田氏も述べているように、街角で新聞、週刊誌を売っているのはインド人。ナッシュマルクトにはトルコ商人が多い。旧ユーゴスラヴィア人は、紛争いらい急増した。東欧からは若い人々が、学生として学び、また子守等で雇われにくる。それにフィリッピン人の看護婦。中華料理店は 400 軒（私は 500 軒と聞いた）ある。こうした民族のサラダボールの中で、倉田氏は、実に様々な人々と付き合い、会話を交わしている。本書をとおして、現実の民族の問題を考えさせられる。

本書で倉田氏は、「国際化時代」という最近の日本のかけ声に対して、こう疑義を唱えている。国際化というのは、英語を話せるということだけではな

いだろう。団体や組織同士が外国人とつきあっても、いわんや政府同士がつき合っても国際化とはいえない。国際化というのは、おそらく違った民族の人と、個人と個人が愛情をもってつき合うことが、出発点になるのであろう。

倉田氏は、オーストリアで知り合った友人たちに対して、もしも戦争になった場合、自分は決して銃を向けることはできないと語っている。まさに同感である。私も、国際化とは、決して外国に自衛隊を派遣することを意味するのではないと思う。むしろ他の国の普通の人々と、暮らしの中で付き合い、互いの文化、生活習慣、考え方の違いに気づき、この違いを尊重し合うことを意味する。本書でも指摘されているが、毎年大勢の日本人観光客がウィーンを訪れ、駆け足で見てまわり、疾風のように去っていく。そして、絵はがきと同じだという感想を残していく。それでも海外に出ないよりはましである。国際化時代の日本人に必要なのは、外国の人々との普通の付き合いである。海外で生活し、カルチャーショックを受け、それでもお互いに理解し会える共通項を見つける。そして国際人となると同時に、いつの間にか日本人としての自分に愛着をもつ。倉田氏は、日本で数少ない、そうした真の国際人のひとりである。そして、本書は、日本人が国際人となる上での最良の手引き書である。

(3)

本書には、その他にも、なかなか面白い叙述がたくさんある。しかし、紙幅の都合上、これを一つ一つ取り上げることはできない。難しい叙述はないので、まずは本書をひもとき、通読することを勧めたい。最後に、本書を理解する上での一助として、今日のオーストリアについて簡単に述べておく。

倉田氏が暮らした1990,91年の当時と今日のオーストリアは、もちろん基本的には変わらないが、いくつかの点で変化が見られる。オーストリアのテレビは、相変わらず国営のORF1,2の2局しかない。しかし、ここでも変化が見られる。倉田氏は、テレビは日本と違い夜通し放映することはないと書いているが、今日では夜通し放映するようになっている。倉田氏が利用したク

レジット・アンシュタルトという国営銀行は、民営化の論議の中で、オーストリア銀行に吸収合併された。その立役者であったヴィクトール・クリーマーは、倉田氏も注釈的に書いているように、フラニツキーの後を次いで首相となっている。難民、外国人労働者の急増にともなって生じた住宅難等から、外国人排斥を煽っている右翼自由党の党首ハイダーの人気はますます高まっている。そして自由党は、政権を担っている社会民主党、国民党と肩を並べるにいたった。ハイダーの路線に反対して自由党を飛び出したグループが形成したりベラル・フォーラムは、党首ハイデ・シュミットのもと、緑の党と並ぶ政党に育った。そして、オーストリアは、1995年EUに加盟した。倉田氏は、この加盟は国民投票にかけられなかったと述べているが、これは何かの誤解であろう。1994年EU加盟の是非を問う国民投票が実施された。今日ではこのEU加盟は、国民の間でははなはだ評判が悪い。高い分担金を払わなければならないし、また、失業も増えた。外国企業によるオーストリアの企業の買収も進んだ。物価は、なるほど食料品の点では若干低くなったが、宣伝されたほど改善されていない。それに経済通貨同盟(EMU)に参加するために、厳しい財政節減法(シュパール・パケット)が導入され、オーストリアの社会福祉体制を直撃している。規制緩和とEU域内の競争の強まりとともに、オーストリアのこれまでの政治経済の根幹をなしていた労資の社会パートナーシップは揺らいでいる。公共交通手段、学費の無料という学生の特権もゆらいでいる。国民の感情も落ち着かないものとなってきている。閉店法も改正され、オーストリアの店の営業時間が長くなっている。オーストリアは今日、転換期に入っているといえる。こうしたオーストリアの変化を倉田氏はどう見ているのだろうか。私は、本書の続編が出ることを期待したい。

(金沢大学経済学部教授)